



瀬戸内の景色が与えてくれるアイデア
帰ってきたと思える居心地の良い場所

しまだ しゅんすけ

島田 舜介さん

株式会社ITONAMI 代表

— 児島産デニム製品の企画・販売、多彩なプロジェクトを通してデニムの魅力を発信している株式会社ITONAMI(イトナミ)の島田舜介さん。王子が岳の麓にある活動拠点、直営店&宿泊施設「DENIM HOSTEL float(フロート)」を訪ね、お話を伺いました。

景観美しき産地に構えた拠点、地元と観光客との懸け橋に

目の前に広がる瀬戸内海、海に浮かぶ島々、行き来する船、瀬戸大橋、四国の山々。ブランド「ITONAMI」のロゴのモチーフにもなっているこの景色から、柔軟な発想が湧いてくるんです。しっかり腰を据えて物事を考える時間がすごく増えましたし、日没も見られるので1日のサイクルも感じやすい。夕日がきれいで、何回見ても美しいと思いますね。僕が生まれ育った兵庫県にも播磨灘があって、瀬戸内海国立公園に含まれているけれど、近い距離なのにそっちの海に行くことはあまりなかったんですよ。でも、この眺めは別格。お客さまもすごく喜んでくれる。経年変化で独特の風合いが増すデニムのように、この景色もその時々によって見

え方が違ってくるのかなって。都会に出てめちゃめちゃ仕事で忙しくて、つかの間の休日に来たときに見ると、きっと受け取り方も違うんだろうなって思います。もともとは岡山市内でデニム関連事業を始め、店舗を持たず移動販売をしていたのですが、ジーンズの産地で生産者がそばにいて、瀬戸内の美しい景観も楽しめる倉敷市児島地区に根差してデニムの良さを伝えたいと思い、活動拠点を持つことにしたんです。場所を探し回中、たまたま巡り合ったのがこの木造平屋の建物。それまで浜川海岸沿いも王子が岳も来たことが全然なくて、正直児島にこんなすてきところがあるなんて知りませんでした。だから僕自身、ラッキー

profile 1994年兵庫県加古川市生まれ。岡山大学在学中の2014年に兄・山脇輝平とデニム関連事業を始め、15年ブランド「EVERY DENIM(エブリデニム)」を立ち上げる。クラウドファンディングを実施し、製品作りやキャンピングカーで全国を回る販売会などを行う。19年岡山県倉敷市児島地区に複合施設「DENIM HOSTEL float」をオープン。20年ブランドを「ITONAMI」にリニューアル。

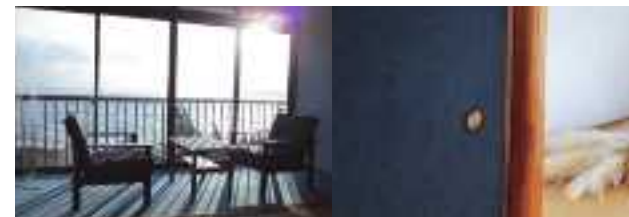


だったなって。いざ「DENIM HOSTEL float」をオープンしてみても、海も穏やかですし、今ではここが心地よい自分の居場所になっていて、兵庫より児島の方が「帰ってきたなあ」と思えるほど地元感も強いですね。若い人たちにこそ、もっと土地の魅力に触れてほしい。そんな思いから客室は藍色に彩り、ふすまや畳縁(たたみべり)、ソファなど随所にデニム生地を使用し、カジュアルにその土地らしさを味わえる宿にしました。また、当初の構想にはなかったカフェですが、やってみるとそのおかげで岡山市や倉敷市など近場の同世代の方も来てくれて、イトナミの取り組みを知ってくれる。遠くから訪れたお客さまと地元の方が交流する機会も増えていて、僕はそれがすごくうれしいんです。旅先で自分とお店の人とだけじゃなく、そこに住んでいる人

とも関係性がつくれれば、まちへの興味や愛着も広がるじゃないですか。実際、ここでの宿泊をきっかけに東京から移住し、新たな生活をスタートされた方もいらっしゃいます。にぎわいを創出することによって初めて気づく地元の良さもあると思います。王子が岳の頂上付近にある、僕もお気に入りのカフェ「belk(ベルク)」さんなんて、センスの良さに惹かれて市外からもたくさんの方がやって来るし、地元の方にとっても自慢したいスポットになっていますよね。地元の方々が瀬戸内海国立公園内にあるこの地域に誇りを持って、出ていきたくないような、いったん離れたとしてもまた帰ってきたくするような場所にしたい。そのためには心を癒やす景色だとか、自分たちの居場所だとか、とどまりたいと思える何かが必要で、僕らの拠点もその一つにしていきたいです。



窓の外に広がる瀬戸内の多島美の景色。見ているだけで心が癒やされます。



float
DENIM HOSTEL

瀬戸大橋を望む海岸沿いにある「DENIM HOSTEL float」。デニムを生かした藍色の内装に包まれた部屋からは瀬戸内海が一望でき、窓際のソファに座りながら穏やかな時間を過ごすことができます。併設のカフェでは11種類のスパイスをブレンドし、水を使わず食材の持つ水分だけで煮込んで作った無水チキンカレーが人気。瀬戸内海にある岩城島の農家から直接仕入れている無農薬レモンを使ったレモネードや有機栽培のコーヒーなど、ドリンクにもこだわっています。

現場で知った高い技術と職人の思い ブランド立ち上げへ

デニム関連事業を始める転機は、大学時代にジーンズメーカーのデザイナーだった方と知り合い、国産ジーンズ発祥の地・児島地区にあるデニム工場を見学させてもらったこと。もともとデニムが好きだったので、その生産現場を見て純粋にかっこいいな、面白いなと思いましたね。有名ブランドの商品も手掛けるなど世界から高い評価を受ける技術が継承されている一方で、ものづくりの大変さや経営の厳しさ、製造拠点がコストの安い海外に移っている現状を聞き、僕に何かできることはないかと使命感みたいなものが湧いてきて。デニム産業の素晴らしさや誇れる技術、職人さんたちの思いを多くの人に知ってほしいと、兄とともに工場や工房の取材を重ね、インターネットで情報発信し始めました。ただ、下請けだったり、守秘義務があったりするので商品自体を紹介できず、それがすごくもどかしくて、それならお客さまにお届けできる製品を自分たちで作ろうと、イトナミの前身となるオリジナルブランド「EVERY DENIM」を立ち上げたんです。

当時はまだ大学生だったのでインターネットを主に、週末になると各地を訪れ、ゲストハウスやカフェなどの一角でポップアップショップのような形で商品を販売。その地域やそこにある産業、生産者の思いにもすごく興味があったので、卒業のタイミングでキャンピングカーを購入し、2018年4月から1年3カ月かけて47都道府県を巡りました。販売会を行いながら衣食住に関わる生産者に出会い、語らう旅。地域と密接



47都道府県、キャンピングカーの旅は「デニム兄弟」の山脇羅平さんと。

に結びついた生産者の生き方はとてもかっこよく見えましたし、温かく迎え入れ、まちの案内もしてくれる人や場所ってすごく大事だなと実感しましたね。そういう場所は思い出深く、満足度も高かったですし、旅先で出会った方たちが岡山や児島に来られたときにも地域やデニム産業の魅力を伝えられ、ここで暮らしたのもづくりも体験できる場所を僕らもつくりたいと思ったんですよ。

みんなが関わるものづくり、産地の新たな魅せ方に期待

ここに来てからブランド名をイトナミにリニューアルしました。地域に根差したブランドとして製品を手掛けていきたい、着る側のお客さまを巻き込んだものづくりをしていきたいと思

いだしたのも、活動拠点を構えたらこそ。現在は、綿の種を配り、育てていただいたものを回収して糸を作り、製品にしてお渡しするという、服作りの過程を1年間一緒に楽しむプロジェクト「服のたね」をはじめ、「服と、ヨリを戻そう。」をテーマに着なくなった大切な衣類をデニム製造に使われるインディゴ染料で染め直すサービス「fukuen(フクエン)」、不要になったデニム製品を回収し、粉碎して綿状に反毛、そこから糸にして生地を織り上げ、再び製品にするプロジェクト「FUKKOKU(フッコク)」を展開しています。もともと楽しいことをするのが大好きなのでいろいろな仕掛けを考えていますが、その入り口は広くしたいなど。僕らの理想とする服の作られ方、届けられ方、使われ方を多くの方々と共有したいですね。

旅をしていて感じたことなんです、ブランドの生産地がその消費地になっていないんです。生産地ゆえに身近すぎて逆に価値を感じにくいのかもしないけれど、そんなイメージも変えていきたい。大人になるとものづくりの現場を見ることも少ないので、新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いたら、地元にあるデニム工場の見学ツアーをやりたいと思っています。職人さんの染め・縫製・加工の高い技術、機械の迫力ある動きなどを体感することでデニムへの親しみが深まり、作り手との距離も縮まるんじゃないのかなって。高齢化や後継者不足などの課題を抱えるデニム産業の担い手も増やしたいんですよ。移住して働くにしてもプライベート面はすごく重要で、でもこの辺りは遊び場が少なくて。そういう意味でもここ

が週末を有意義に過ごせる場所になれば、このまちに居てもいいかなって気持ちになると思いますし、そのパイプ役になればいいなと。

施設内はグランピングもできるように整備しましたし、他にもやりたいことがいっぱいあるんです。産地の新たな魅せ方、場所の在り方の表現など、僕らの年齢が若いのもあって地元から期待されているのも感じていて。海も山も楽しめる環境で、デニムを掛け合わせてどこまでできるか。今後もさまざまなアプローチを試みていきたいと思っています。



海沿いでスカートをはひらひらさせながら着てほしいというテンスル素材のワンピース、一目で気に入ってしまいました。



山登りやマリンスポーツにおすすめのガゼットクロッチ、メッシュ仕様のショートパンツなど、ITONAMIが手掛ける商品は素材や機能性へのこだわりはもちろん、この地域への愛着を感じるものばかりです。



自然と人とが共存する瀬戸内海国立公園
表情豊かな多島海景観に魅せられて



やまもと あつひろ
山本 厚宏さん
瀬戸内フォトグラファー

——瀬戸内海国立公園随一の絶景スポットとして知られる鷺羽山に20年以上上足しげく通うフォトグラファーの山本厚宏さん。四季折々の変化に触れながらこの地域ならではの魅力を写真に込めて、瀬戸内の“今”を発信し続けています。

感動の風景と身近な自然の神秘 その瞬間を写真で伝えたい

瀬戸内海国立公園の魅力は大きく言うと2つあって、1つは表情がとても豊かな「多島海景観」ですね。同じ場所から撮影しても、季節や時間、気象、太陽の位置と角度によって海の色が全く違って見えるんです。島々、船、人々のシルエットを組み合わせるとどれ一つとっても同じ写真はなくて、いつ来ても新鮮なんです。もう1つは「人が暮らす国立公園」であること。ここ鷺羽山周辺は古くから漁業が行われ、かつては北前船が寄港するなど海上交通の要衝として栄えました。国

立公園と聞くと自然だけをイメージするかもしれませんが、瀬戸内海国立公園は多様な産業や文化が生まれた地域であり、自然と人との共存によって成り立っています。だから、景色だけを見て満足して帰るんじゃなくて、例えば、倉敷市下津井地区の漁師さんや児島地区のジーンズ職人さんと話をしてみるなど、その土地ならではの人の交流や食文化を体験し、できるだけ滞在して楽しんでほしいなと思うんです。僕はもともと大阪に住んでいたのですが、結婚し、妻の実家

profile 1965年大阪府大阪市生まれ。大学卒業後、大阪市内で約10年間飲食レストランマネジメントに従事。99年岡山県倉敷市児島に移住し、システム開発コーディネーターを経て2010年から公益社団法人岡山県観光連盟に勤務。写真撮影や情報発信、企画立案を行う傍ら、環境省の鷺羽山地区パークボランティアや自然公園指導員も務める。

がある児島地区に帰省するように。来るたびに程よく便利で程よく田舎なところに惹かれ、海もすごく好きだったし、ずっと自然の多い場所に住みたいと思っていたので、長男が生まれてから移住したんです。瀬戸内の風景と身近な自然の豊かさに魅せられ、16歳で一眼レフを買ってから趣味にしていたカメラにさらにはまり、インターネットを通じてその魅力を全国に発信し始めました。お気に入りの写真は、児島の観光ポスターのために撮影した、鷺羽山



特に思い入れがあるという山本さんの写真が使われた児島の観光ポスター（写真左）。



からの夕日。鷺羽山は瀬戸大橋の壮大さはもちろん、島々の奥行きを感じられる写真を撮るのにちょうどいい標高(133m)なんですよ。さらに「日本の夕陽百選」に選ばれていて、瀬戸内海や空を赤く染める夕日は感動そのもの。地元の商工会議所などがその夕日の魅力を前面に打ち出したポスターを製作するというので協力依頼を受け、2カ月近く、何日も鷺羽山に通いました。単に夕日の写真と言っても、空がオレンジ色にきれいに焼けて見えるには太陽の高度や大気中の水蒸気量も重要。空気が乾燥している冬場の撮影だったのでなかなか満足するカットが撮れなかったのですが、偶然にも夕日、瀬戸大橋、そこを通過する列車、真下を通る船が一直線に並んだ瞬間を写真に撮ることができました。鷺羽山に20年以上通い、撮り続けている写真の中でも、とても感慨深い1枚ですね。

僕の撮影スタイルは、ズバリ「感動の瞬間」を写真に残すこと。例えば、花や新緑、紅葉の時期は毎年通ってベストの日をチェックしたり。虹や雲海、積雪などめったに見ることができない気象条件を事前に予測して撮影に出掛けたり。もちろん空振りに終わることも多々ありますよ(笑)。「どうしたらそんな写真が撮れるんですか?」とよく聞かれるんですが、普段からこんな写真が撮りたいと常にイメージしておくこと、とにかく予感がしたらダメ元でも行ってみることが大事だと思っています。

写真以外にも、大好きな自然に関わりながら地元の役に立ちたいという思いから、環境省の「鷺羽山地区パークボランティア」にも登録。瀬戸内海国立公園の自然解説や美化清掃活動などに協力するとともに、鷺羽山を訪れた人がこの場所をより楽しめるようアイデアを出しています。周辺に自



山本さんがボランティアとして設置に携わった樹木の名板。QRコードがついていて、読み込むとすぐに植物の情報が分かるようになっています。気になった樹木があればぜひチェックしてみてください。

生する植物に興味を持ったときの手掛かりになればと、専門家の調査をもとに2017年から遊歩道沿いの樹木に名板を設置。現在約60本あり、今も随時増やしているところです。こうした活動を評価され、2020年からは環境省の「自然公園指導員」を委嘱されています。



© Atsuhiko Yamamoto



© Atsuhiko Yamamoto

鷺羽山エリアからの瀬戸内海。長年通い詰めている山本さんだからこそ撮れる写真です。



この日の頂上からの夕日は心が奪われるほどきれいでした。

今後は地元の方にも改めて鷺羽山の素晴らしさを再認識してもらい、この景観を誇りに思ってもらいたい。そして、SNSなどでどんどんその魅力を発信してほしいですね。今はコロナ禍です

が、 destinations (旅行先)として世界中の旅行者が目指してくるような、旅行者よし、地域よし、住民よしの“三方よし”の持続可能な観光地域になってほしいなと思っています。

人の営みや文化、歴史に触れられる下津井町並み保存地区



鷺羽山に来られた方には、麓にある下津井地区もぜひ訪れてほしいです。ここは江戸から明治時代半ばにかけて北前船で栄え、今は漁業の町として知られる港町で、岡山県の町並み保存地区になっています。僕も写真を撮るときはまず神社に寄ってみたり、お店に顔を出してみたり。人の営みが写真に入ると温かみ加わりますよね。瀬戸内海国立公園の魅力として、人々の生活やいろいろな文化に触れ、歴史と重ね合わせながら地域を理解し、トータルでいい場所だなと感じてほしいと思っています。

下津井を散策していると目にする、サンゴを祭った祠(ほこら)。瀬戸内海の島や漁業の盛んな地域では底引き漁などで網に掛かったサンゴを祠に祭る(供える)風習が見られます。漁師さんや地元の方に祭る理由を聞いてみると、だいたい「昔からずっとそうしてきたから」という答えが返ってくるんですよ。瀬戸内海のサンゴ自体が非常に貴重で珍しく、その白く独特な形状からも、神社のない小さな漁村の集落などではご神体として大切に祭り、海の安全と豊漁を祈願したのではないかと考えられます。今のように天気予報や台風情報のない時代に、海という常に危険と隣り合わせの場所で毎日働いていた漁師さんたちから信仰が生まれるのはごく当然のことで、瀬戸内ならではの風習なので個人的に非常に興味深くて。僕の知る限り、瀬戸内海国立公園内では岡山県の松島、真鍋島、香川県の櫃石島、本島、佐柳島などにあって、サンゴを探すことが島巡りの楽しみにもなっています。



港町の風情が残る下津井町並み保存地区。アニメ映画『ひるね姫』の舞台となった田土浦坐神社の石段や路地裏などを案内してもらいました。

下津井で働く人インタビュー

むかし下津井回船問屋 館長



下津井の歴史を伝える貴重な資料館

下津井はかつて島だった児島半島の最南端にあります。瀬戸内海航路の要衝で風待ち・潮待ちの良港として栄え、江戸時代には西日本各地の船や北前船が寄港。当時周辺では急速に進んだ干拓の地で綿が栽培され、北海道から運び込まれたニンジンかすを肥料として重宝し、それが繊維のまち、ジーンズ産地へとつながりました。当館は日本遺産ストーリー「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」の構成文化財の一つになっており、倉敷市の3つの日本遺産を紹介するインフォメーションも設けているので歴史や文化にも触れてほしいです。私自身、鷺羽山地区パークボランティアの会長として鷺羽山と下津井それぞれに互いの案内プレートを置くなど回遊性向上にも力を入れています。

吉又商店 代表



名産「下津井わかめ」復活へ一念発起

下津井沖の速い潮の流れにもまれ、浅いところで太陽の光をたっぷり浴びて育つ下津井産ワカメは薄くて良質。ワカメは採取後すぐに湯通しするのが一般的ですが、加熱せず、海辺で1日かけて天日干した「下津井わかめ」は香り高く、栄養分が多く含まれているんです。かつて特産だった素干しワカメの魅力を多くの方に知ってもらいたいと、35年間勤めた小学校教諭を辞め、明治初期に曾祖父が創業し1974年に途絶えていた実家の海産物問屋を2011年に再開。今ごろになってやっとその価値が認められ、皆さんがおいしいと言ってくださるんです。手間がかかる作業で量産は難しいですが、下津井の海からの貴重な恵みを観光に生かしたいですね。



明治の回船問屋やニンジン蔵として使われていた建物を復元し、1995年に開館。当時の商家の様子が垣間見られます。下津井にまつわる資料を展示している他、地元特産物の販売所、食事処もあります。



明治から昭和初期の商家のたたずまいを体感できる母屋。堂下さんは「下津井に来られた方がまち全体をゆっくり楽しめるよう、地元や行政と連携し、もっと観光地らしい場所にしていきたい」と話します。



取れたての新鮮なタイはすぐに天日干し。昔に比べて漁獲量は減少傾向ですが、それでも下津井で獲れる魚は身が締まっていておいしいのが特徴。お店ではノリや煮干しなどの乾物も販売しています。



看板商品の「下津井わかめ」を手にしながら「私たちが目指しているのはきれいな海ではなく、人も生き物も植物もともに暮らしていける豊かな海なんです」と余傳さん。その笑顔が印象的でした。

就鳥 鷺羽山を
あるく。

場所によって
刻々と変わる
景色を楽しんで。



備讃瀬戸、塩飽諸島の
多島海景観が一望できる鷺羽山。
「これこそ国立公園の核となる風景」と
絶賛された随一の展望地です。



レストハウスから遊歩道を進んでいく
と視線の先が開けて瀬戸大橋が見え
てきます。途中、大きな岩に上って
雄大な景色を独り占め。
深呼吸でパワーをチャージ!



「日本の夕陽百選」に選ばれている夕景の瀬戸大橋は息をのむ美しさです。



山頂へと続く石段、あともう少し。

ビジターセンター近くには児島の俳人・難波天童に
よって詠まれた句「島一つ 土産に欲しい 鷺羽山」
が刻まれた石碑が立っています。

鷺羽山山頂



頂上からはどかな瀬戸内海に点在する島々と四国へと連なる壮大な瀬戸大橋の全景が見え、
吸い込まれそうな迫力。時がたつのを忘れ、いつまでも眺めていたい風景が広がります。

さらに奥へ、
あずまや展望台に
向かいます!



山頂からは10分ほどの道のりです。



あずまや展望台



真正面から見る
瀬戸大橋は
圧巻です!

山頂の東から南方面にかけては児
島から王子が岳、遙か先に四国高
松を望むことができ、まさに遮るも
のが何一つない360°の絶景ビュー
スポットです。

そこにさらなる価値を見いだすまちづくり
自分たちの身近にあった自然景観の尊さ



やぶき けんた

矢吹 健太さん

倉敷市観光課

みやけ としはる

三宅 利治さん

玉野市商工観光課

——今回訪れた岡山県倉敷市・玉野市で生まれ、今や地域行政を担う立場で瀬戸内海国立公園をアピールする若手職員の2人。ここに魅力を生かし、できることは。地元への熱き思いがあふれる対談を通して、地域の未来をともに考えます。

やっと気づいた、王子が岳や鷺羽山の景観の素晴らしさ

——瀬戸内海国立公園の中にある地元に、どのような思い出がありますか？

三宅 子どもの頃は渋川海岸や渋川マリン水族館に家族でよく遊びに行っていました。でも、高校生や大学生になって行動範囲が広がるとどんどん疎遠になってしまっ。商工観光課に配属されて改めて渋川や王子が岳に行った時、海も景色もめちゃくちゃきれいだなって感じたんです。王子が岳は名前を知っていたもののそれまで行ったことがなくて、ちょうどニコニコ岩がクローズアップされているタイミングでもあり、地元の魅力を再認識しましたね。

矢吹 鷺羽山展望台には小さい時に来たことがあり、就職で地元に戻り久しぶりに来てみると、第2展望台だけでなく、鐘秀峰(山頂)や、瀬戸大橋を真正面から見られるあずまや展望台

など、いろいろなアングルからの眺めが楽しめる場所だったんだと再認識しました。瀬戸大橋は土曜日を中心に夜になるとライトアップされ、ごくまれに満月と重なる日があり、鐘秀峰から見た、ライトと月光、海面に映る月の道が織りなす夜景はとても幻想的だったし、初めて王子が岳に登った際には、山頂付近にある観光休憩所「王子が岳レストハウス」の屋上からの絶景にもものすごく感動。平成30年7月豪雨災害関連の業務で精神的に疲弊していたこともあって心が癒やされ、涙が出そうになったのを覚えています。王子が岳レストハウスが倉敷市の管理する施設だと知ったのもその時で、直後に観光課の施設担当になったことに運命的なものを感じましたね(笑)。

官民連携で国立公園のにぎわい創出、周遊性アップを目指す

——国立公園に指定された景勝地として地元を盛り上げるために、行政としてどんな取り組みに力を入れられていますか？

三宅 王子が岳はボルダリングの聖地としてPRしています。瀬戸内海沿岸は花こう岩地帯で登りやすいところがありますが、中でも王子が岳は登った先で海を一望できること、駐車場が近く、車を停めて5分も歩けば岩場があるという立地の良さも魅力で、多くのクライマーが訪れています。ハイキングやパラグライダーなど多彩なレジャーが楽しめ、山頂付近の「王子が岳パークセンター」内に人気のカフェ「belk(ベルク)」さんがあるところもプッシュしています。belkさんはSNSの普及と発信の上手さが若者らにすごくマッチしていて、天候の良い日は駐車場がすぐにいっぱいになると聞いています。

矢吹 王子が岳の麓にあった国民宿舎が2012年3月に廃止、その後解体となり、先の見通しが立たない状況の中で、belkさんや「DENIM HOSTEL float(フロート)」さんなどの若い方々がこの場所に関心を持ってビジネスに取り組んでくださっていて、倉敷市としても2020年秋以降、民間事業者に王子が岳レストハウスを試験的に使ってもらう「トライアル・サウンディング」を実施。その結果をもとに今後の有効な活用方法を検討しているところです。マスキングテープ「mt」を手掛けるカモ井加工紙株式会社さん(倉敷市)が昨年7月から8月にかけて開催した期間限定カフェ「mt cafe at 王子が岳」のインパクトも大きく、風向きはすごくいいですね。

三宅 渋川海岸は環境省の「快水浴場百選」をはじめ、「日本の渚百選」「日本の白砂青松100選」にも選ばれており、毎年大きい海水浴場を開設しています(ここ2年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため開設を中止)。今は民間事業者にグランピング施設の改修に力を入れてもらっていて、官民で協力しながら活性化を図っていきたいと思っています。



©2019 Tepei Kobayashi. All Rights Reserved.

日本一の景観と環境と称される、王子が岳のボルダリング。

profile 矢吹 健太 1984年岡山県倉敷市生まれ、2007年倉敷市入庁。国土交通省への出向、新市・まちづくり推進課、福祉支援課などを経て19年観光課に配属。観光施設・資源を活用した施策企画・実施の業務を担当。

三宅 利治 1992年岡山県玉野市生まれ、2014年玉野市入庁。政策財政部税務課、大阪府泉大津市への出向を経て19年産業振興部商工観光課に配属。国立公園や海水浴関係、観光施設の管理業務を担当。

矢吹 民間事業者に参画していただくことでにぎわいが生まれますよね。鷺羽山でも昨年7月、展望台にポケットモンスターのキャラクターをデザインしたマンホールのふた「ポケふた」が設置され、集客に一役買っています。昨年は新たな試みとして鷺羽山や王子が岳を巡り、近くのカフェでSNS映えるような完成度の高いクリームソーダを味わう「絶景とクリームソーダ」というツアーを企画したのですが、コロナ禍で幻に終わってしまっ。今年こそぜひ実現したいと思っています。

—— 倉敷、玉野の両市がタッグを組まれることも多いんですか？

矢吹 瀬戸内海国立公園の周年事業は一緒になって大々的に盛り上げていますね。また、瀬戸内海に沈む夕日と音楽を楽しむ「サンセットフェスタ」は王子が岳と鷺羽山で毎年交互に開催していて、王子が岳では両市の関係者が協力しています。今年は瀬戸内国際芸術祭があり、宇野に来られる方も増えると思うので、市境にある王子が岳がにぎわうような取り組みを展開し、児島方面への流れもつくれたらいいなと。

三宅 王子が岳に来られる方にしてみれば倉敷も玉野も関係なくて、関係団体による協議会でもみんなで盛り上げたいという声は出ています。玉野市内にも新しいホテルができていますし、倉敷市と協力し、互に行き来してもらいながら地域経済の活性化につながる仕組みをつくっていききたいですね。宇野駅から児島駅まで自転車で1～2時間程度。岡山県が推奨している、渋川・児島エリアの瀬戸内海沿いを走るサイクリングコースもありますし、宇野から児島、児島から宇野という流れができればより周遊性が向上すると感じています。



「名曲喫茶 時の回廊」のクリームソーダ。幻想的な店内でも人気です。

地元を再認識する機会、何度でも楽しめる仕掛けづくり

—— 観光地としてPRしながらも地元の方々が愛着を持てるまちづくりへ、今後どのように関わっていききたいですか？

三宅 人事交流で大阪府の自治体に出向することになり、生まれも育ちもずっと玉野だったので、その時初めて玉野を外から見たんですね。穏やかな瀬戸内海や、景観の良い王子が岳があり、瀬戸芸の会場になっている島々にも近くて、観光地としてこんなに恵まれたところはなかなかないんじゃないかなって思いました。玉野から一度も出たことのない人にとっては今あるものが当たり前と感じられる。僕は仕事をきっかけに地元の魅力を再認識することができたけれど、玉野を出るきっかけのない地元の方には再認識する機会がありません。王子が岳でポルダリングのイベントに関わる事業者と話をし

みると、玉野への熱い思いはもちろん、自分たちの取り組みをきっかけに関係人口が増え、周辺への出店が経済的な強みになってくるのではないかと考えてくださっていて、そんなふうにならなくて、人が来るという好循環が生まれ、メディアやSNSでクローズアップされればされるほど地元の方も再認識することができるのではないかと。そこで「せっかくだから行ってみよう」と思ってもらえたらうれしいですね。

矢吹 瀬戸大橋開通時に鷺羽山を訪れた方も多いと思うんですが、一度行ったことのある場所でも目的が違えば全く別のものになります。ポケふたやクリームソーダのツアーもまさにそれで、見せ方や切り口を変えれば同じ場所であっても何度でも楽しめるんですよ。ここにある景色に何かしらの付加価値が加われば、それを目標に訪れる方も増える。そういうものを見つけ、掘り起こし、発信するのが僕らの仕事。地域の民間事業者やNPO、地元の方々の声に耳を傾けながら行政として



何ができるかをしっかりと考えていきたいです。

三宅 「観光地があるからいいよね」ではなく、そこに行ってみたくと思える仕掛けづくりが必要で、水族館では謎解きイベントなど吉本興業株式会社さんとコラボした企画もしています。来られた方から「楽しかった」「いいところですね」と言ってもらえるだけでも取り組んだ意味はあると思っています、みんなの思いを形にしながら、より魅力的なまちづくりを進めていきたいです。

矢吹 僕も三宅さんと同じで、倉敷には産業、海、山、美観地区の町並みなど、どのエリアをとっても観光地になり得る資源があることに、外に出て初めて気づかされました。瀬戸内海国立公園内には鷺羽山や王子が岳の他にも、多くの参拝客が訪れる由加山やハイキングで人気の龍王山、ツツジや夜景がきれいな通仙園もあります。国立公園に指定されたこの素晴らしい景観をこれからも守っていききたいし、多くの方に楽しんでいただきたいですね。



瀬戸内Story

発効日 / 2022年3月 第1刷発行
 発行者 / 環境省 中四国地方環境事務所
 〒700-0907 岡山県岡山市北区下石井1-4-1
 岡山第2合同庁舎ビル11F
 TEL 086-223-1586 / FAX 086-224-2081
 WEB <http://chushikoku.env.go.jp/>

企画・制作 / 両備ホールディングス株式会社
 アートディレクション・デザイン / 加藤訓子
 デザイン / 秋岡葉子
 ライティング・校正 / 内田亜矢子
 撮影 / 高橋孝介 (WONDERFUL PHOTO)
 印刷 / 大日本印刷株式会社

※本誌掲載のデータは2022年3月現在のものです。
 ※内容の無断転載はご遠慮ください。



瀬戸内海国立公園サイト
<http://www.env.go.jp/park/setonaikai/>

瀬戸内Storyの案内人を務めて 蓮井梨央

その時々によって全く違う表情を見せる瀬戸内海には、岡山で生まれ育った私も毎回心惹かれ、癒やされます。ただ、元来ある自然はもちろん素晴らしいですが、瀬戸内海国立公園がこうして魅力ある場所として保たれているのは、関わる皆さんのご尽力があってこそなのだと感じました。今回お話を伺った皆さん全員から、瀬戸内への大きな愛が伝わってきて、とても温かい気持ちにもなりました。瀬戸内の美しい景色とともに、そんな皆さんの思いがもっと広く深く伝わっていくことを願っています。

編集後記

“瀬戸内Story”はいかがでしたでしょうか。今回お話を伺った方々は、瀬戸内に惹かれ、その魅力を多くの人に伝えたいという熱い思いから実際に行動を起こし、地域の盛り上げにご尽力されています。この地域にそんな方々がいらっしゃるからこそ、何よりの財産ではないかと感じました。鷺羽山や王子が岳には、写真では伝えきれない空気感や人を惹きつける魅力があります。ぜひこの場所に、人に会いに来てください。そして瀬戸内の豊かさを肌で感じてください。また、ここで暮らす方々にとっても、国立公園に指定された地元へ愛着や誇りを持つきっかけになればと願っています。最後に、制作にご協力いただいたすべての皆さまに心から感謝申し上げます。

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。
 この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係わる判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [Aランク] のみを用いて作製しています。